

新発見「龍馬の手紙」に登場する

福井藩三人の関係

平 成29年1月13日、坂本龍馬の手紙が新たに発見されたニュースが大々的に報道されました。報道では、龍馬の「新国家」建設にかけける情熱と周到な根回しに焦点が当てられましたが、改めて、福井藩の幕末明治に果たした役割も注目されました。新発見の手紙に登場する中根雪江、松平春嶽、由利公正はどのような関係にあったのでしょうか。

発見された手紙は、龍馬から、福井藩の重臣で春嶽を側用人として補佐した中根宛てられたものです。慶応3（1867）年11月10日に書かれたとされる手紙には、こう記されています。先頃直接申し上げて

おきました三岡八郎（後の由利公正）兄の上京、出仕の一件は急を要することと思っておりますので、なにとぞ早々に（福井藩の）ご裁可が下りますようお願い奉ります。三岡兄の上京が一日先になったならば新国家の家計（財政）の成立が一日先になつてしまふと考えられます。ただ、この所にひたすらご尽力をお願いいたします。

当時、由利は、挙藩上洛計画の中止により、文久3（1863）年から蟄居の身にありました。『由利公正伝』では、当時の状況について、「龍馬との福井での会談以降、再三、新政府側から招へいの手紙が届いたにも関わらず、知らされることがなく、



中根雪江肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

12月半ばになってようやく派遣の決定が下された。この復権遅延は、守旧派の嫉視。」と記しています。

この背景には、挙藩上洛計画を巡る守旧派・改革派の対立があつたとされます。挙藩上洛計画は、由利や横井小楠が中心になって計画したもので、藩を挙げて武装し、京へ上り、一挙に攘夷派を一掃、国論を開国に向けて統一しようとするものでしたが、これに反対したのが、今回の手紙の宛先である中根でした。中根ら守旧派は、幕府を無視する行動や藩を危うくする行動は慎むべきだと主張しました。実は、春嶽も改革派の動きを警戒していたとされ、「君臣の名分を重んじることなく、幕府をないがしろにし、藩主を軽んじ、…」（松平春嶽末公刊書簡集）として、改革派を批判する内容を書簡に記しています。

この対立の本質は、藩と国家のいづれに重きを置くかの問題だったといわれています。国家を思い行動を

起こしたものの挫折した由利。その思いは、今回発見された手紙に龍馬が記した「新国家」の下で、発揮されていくことになるのです。

関連史料・ゆかりの地

恒道神社



まつたいらしゆんがく 松平春嶽を祭神とする福井神社。その境内左手にあるのが恒道神社です。春嶽の側近として藩政改革や幕政改革に関わった中根雪江が、はしもとさない すずきちから 橋本左内、鈴木主税とともに祀られています。時代を経てもなお、春嶽を支えているようです。

【住所】福井市大手3丁目16-1（福井神社境内）（JR 福井駅より徒歩9分）

参考資料等

三岡丈夫編『由利公正伝』光融館
三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社、福井市立郷土歴史博物館編『松平春嶽末公刊書簡集』